

シンポジウム

持続型都市に向けて：アジアの都市、その記憶と未来

日時：2005年2月26日、27日

主催：国土舘大学アジア・日本研究センター

共催：アジア近代建築ネットワーク (mAAN)

協賛：三菱地所株式会社

後援：社団法人日本建築家協会、社団法人日本建築学会

場所：日本工業倶楽部会館 三階 大ホール、丸の内ビルディング八階・
コンファレンススクエア Room 4

アジア諸都市の急激な変貌のなか、20世紀の記憶としての近代都市像が失われつつある。経済成長の名の下に、都市空間は変遷を続け、「SF的未来都市」イメージの先行と軽薄な乱開発などが重層しソフトで自然な文化継承が危機におかれている状態だ。アジア大都市の中心部にある旧工業地帯もその一例であり、単体で広大な敷地を持つ工場群などは都市開発には恰好な「物件」である。しかし、これらの工場群にはその都市の経済成長を支えた「記憶」が文化遺産として建築という形態で残されている。当時、最新の技術で合理的に建設された建物にも、時代を物語る痕跡な構造として、空間として、またデザインとして残されている。一方で、これらの建築物やランドスケープなどは「未来」的な要素をまだ充分保持しており、特に工場の生産空間などは新規で開発される建築空間よりも風情を感じさせるものが多数ストックとして残されているのである。すなわち、これらの既存建築ストックは過去の「記憶」を「未来」に継承する重要なDNAでもあり、また、持続可能な社会を構築していかなければならない人類にとって貴重な要素であることを忘れてはならない。本フォーラムは中国の国際都市上海市を事例とし、持続型都市の可能性を工業遺産再生の文脈で探求していく。

ここに登場する各氏は本シンポジウムにての講演者の方々である。基調講演ではアジアを代表する建築・都市デザイナー、ウィリアム・リム氏、日本を代表する建築家で東京理科大学教授の小嶋一浩両氏がアジアにおける都市と環境に問題提起した。

本学21世紀アジア学部梶原景昭教授は、自身のアジア的「記憶」として祖父のアルバムをとおして上海を本シンポジウムに位置づけた。

また、台湾国籍である建築家登琨艶（Teng Kunyan）氏と東京大学助教授でアジア近代建築ネットワーク（mAAN）代表村松伸氏は、文化遺産再生運動を題材として方法論を含めた都市の記憶、その文化性、経済性、及び空間性について語った。特に2004年8月、2週間にわたってmAANと登氏共催、同済大学の協力による「上海工業遺産再生ワークショップ」が、登氏の所有する工業地区にて開催されており、アジア、ヨーロッパより参加した学生に都市再生教育を行った経緯などが報告された。

以下は、本シンポジウムの講演記録である。

William S W Lim : 建築家

「Asian Architecture in the New Millennium; A Postmodern Imagery」

日本の社会について：

日本は現在、様々に大変な問題に直面しているが、その政策はヨーロッパを中心とした、資本主義に基づいた解決法があまりに多く、NGOや専門家からも、この硬直した社会制度に対して改革を求める論議があがっている。21世紀の理想的な社会の構築を多次元的なアプローチで考えていかなければならない。

東京は経済発展を遂げ、変貌し続けている都市である。生活の質を上げ、キャリアをつんで高サラリーを求めるといった価値観も生まれた。この中で経済の発展の中において日本人のニーズが何処にあるのかを探っていく必要がある。グローバルな都市の中で経済成長を遂行するにあたり、日本人にとって何が大切なのかを考えていかなければならない。今までの日本は色々な意味で受身であった部分がある。だが出生率が下がり、移民も増えていく中で、これからの日本の選択肢は何なのかという考察を迫られるだろう。そして我々は、世界の中でこれだけ開発を遂げてきた社会における建築学、建築がどういった意味を持つのか研究しなければならない。

新しい世紀におけるアジアの建築、ポストモダンにおけるイメージについて：

ここ何十年の間、私は建築都市学に関わり、その急激な変革を目にし、その中でポストモダニズム、グローカリティ、社会公正などの論議に積極的に参加する必要性を感じてきた。アジア地域でのこれらの応用を考えるにあたり、建築や都市デザイン以外の専門家との交流を図り、見解を広げ、発想を再構築し、強化してきた。

最近まで建築や都市学の論議は、地域的や社会的に異議があったにしろ、西洋モダニストの中にあった。ここではその問題点として、ヨーロッパ中心のモダニティについて、チャールズ・ジェンクス（建築史家Charles Jencks）のポストモダニズムについて、そしてポストモダニズムの空間についてという三つについて論じていきたいと思う。

まずはヨーロッパを中心としたモダニティについてであるが、西洋におけるモダニティは歴史的なトランスフォーメーションのプロセスとして自由、人権、個人、民主主義、法による秩序の概念で理解されてきた。しかしながら非西洋圏では、ブレンダ・ヨウ氏が「植民地化は物理的、政治経済の威圧や支配だけではなく、イデオロギーと文化の押し付けでもある」と述べている程、植民地においては支配側からの伝統的な建築の価値が見落とされてきた。その時代に行われた美的価値観の支配は、アジア都市の都市環境の視覚的なイメージや過去への賞賛を歪め、その影響は現在も続いている。

建築の早期モダンムーブメントの主な特徴としては、アートソースのダイナミックな時期からの発達、欧州のクリエイティブ且つ審美的な伝統からの影響などが挙げられる。植民地支配を受けなかった日本とタイは、欧州の影響とモダニゼーションに直面するにあたり、西洋の歴史的なリバイバル主義の建築スタイルを意識的に受け入れ、地域色と融合させた。特に日本のモダンアーキテクチャーからは西欧への貢献も見られる。植民地化された地域では、こういった融合は許されず、価値観を威圧的に押し付けられた。それは独立後何十年たっても欧州中心のモダニティの独占が揺るがなかった面を見ても明白である。

モダニストのビジョンは資本主義やグローバル化による高層ビルやハイウェイを生み出し、倫理・道徳観の代わりに台頭してきた利益主義は、堅苦しいゾーニングや利益の管理など、ビジネスや政治家に富を築かせるという結果を生んだ。日本はその面、カオスやエキサイトメントをうまく利用したと言える。非西洋の現実を理解するためには、その論理への反論が不可能であるならば、背後にある概念に目を向ける必要があるのではないか。そのためにテキストや文書などを徹底的に読み直さなくてはならない。歴史から分かるように、文化の優劣性によって、表現や意味の妥当性が決められてしまっているからである。

二つ目に挙げたのはポストモダニズムであるが、公民権闘争、学生デモ、反ベトナム戦争運動などの60年代の社会変化は、建築文化にも大きな影響を及ぼした。国際様式や都市の改造が糾弾され、ニューブルタリズム様式が非難され、1972年7月には建築史家ジェンクスがプリーツアゴー団地の解体をもってモダニズムの死を宣言した。これはむしろ社会動向の象徴であったといわれるが、ポストモダニズムは建築アプローチに、モダニズムに影響され過剰になっていた設計プロセスや形式主義などからの解放感をもたらし、多くの建築家を惹き付けた。

数年に渡りイメージ豊かに展開されたポストモダニズムであるが、アメリカ以外では真剣な指示を得るには至らず、最近になるにつれ、その解釈はますますフェティッシュでテーマパーク的になっている。表面的な様式的デザインツールとしてのみ使用され、その建築は過去の様式の皮肉っぽい表現となり、いかなる広域な理念的土台からも切り離されている。これがポストモダニズムを単なるデザインの理論として扱ったむなしさの証明であり、本来の多元的で人間的な理念が理解される上での障壁となった。これが解決していければと望んでいる。

そして、ジェンクスによるモダニズムの終焉についてだが、これは各理論の再位置付けを促す新しい思想の場を用意したと言えよう。特に第二のモダニズムであるハイパーモダニズムなどの理念に着目し、躍動的な今現在のアジア都市におけるポストモダンの視点をもった建築や都市計画の、増えつつある議論を押し進めている。

次に挙げたポストモダニティの空間は多次元的、知的、精神的、文化的、物理的など、様々な概念が盛り込まれている。またポストモダニティは複雑な組み合わせ、流動性、雑種性、モダニティとポストモダニティ間の脱テリトリー化が特徴であるが、これは世界的な文化の現象として随所に存在している。そして若い世代の価値観やライフスタイルにおいて未だ影響が見られる。だが急変する社会状況の中での論理的、社会的な正義の前衛的な啓蒙的解釈としては、評価が足りないと言えよう。

この論議の中では、これまでの開発で取り残された地域、あるいは新開発により意図されて作られた場所である、不確定空間の重要性を認識する必要がある。その多元的でファジー、複雑でカオス的なレベルに荒廃が達したときに、急激な変化に耐えうるフレキシビリティな空間が生まれる。中国のチャン・ユン・ホウ (Chang Yung Ho) 氏が唱えたマイクロアーバンイズムでは、変わりゆくアーバンライフの要求を精査し、古いエリアの組織的な秩序を再決定しなければいけないと述べている。こういった変化の面において現代建築はアートの世界と類似する側面がある。とはいえアートに比べて建築や都市計画は規模が大きく、そのため様々な制約が押し付けられる場合も多い。都市構造や地域文化、価値観やライフスタイルが変化したことにより、急進的な経済発展、構造改革により革新的なヴィジョンが生まれ、アジアは新しい都市モデルに向かっている。都市の建築表現は複雑で多元的な混沌のようになり、都市的であり、時に荒廃的であるという二面性も見られる。しかしながら持続性という観点において、西洋の直線的且つ継続的な時間の流れの概念では、なかなか解釈されにくい。

まとめ：

過去2、30年ほど、アジアの建築家は、独自のアジアらしさと地域の特徴を持ったアイデンティティに関する議論やその探求により深く関わるようになり、歴史保存や環境保護の重要性がより理解

されるようになってきた。現代的な地域性は、見境なく破壊され変化し続ける都市での地域文化への拠り所として、広く受け止められるようになってきている。それは、空間的なアレンジや場所、気候、それに則した既存且つ象徴的な認識を創造する際の、ある場所におけるユニークな受け取り方との意識的な関わり合いであろう。ヘインズ・ペットゾルド（Heinz Paetzold）は、現代的な地域性は今日の世界文化に視点を置いた地域文化の、新たに明示された建築の実践だと説明している。建築の分野は前衛的で流動的でなければならない。良質且つ大規模な建築プロジェクトは、地域の建築や既存の建築文化、その批評に重要で刺激的な影響を与え続けている。

こんなにアジアの建築をモダニズムの視点から解説するのは不可能ではないだろうか。それは建築や都市化は、モダニズムという概念を超える勢いで広がっているからである。これは中国のホー・ハン・ルー（Hou Hanru）氏が、建築が始まってからまたプランニングするという意味で、ポストプランニングという用語を使った事でもわかる。また、建築や開発によって都市が自滅してしまうことを指し、「アーバンサイト」という言葉も出現し、上海などの大都市の中心部の再開発に警告を出している。

アジアの建築と都市計画は、驚くほど複雑な都市のイメージと構造的な混乱を急速に促しもたらしてきた。アジアの建築家がどのようにこの難しい状況と取り組んでいるのか、そしてモダニズムという合理的・分析的な枠組みの中でのみ今日のアジアの建築を語ることができるというのを紹介して終わりたいと思う。

小嶋 一浩：東京理科大学教授，C+Aパートナー

「アジア小都市における建築的实践」

アジアをターゲットにした話をということなので、今回は自分の仕事の中でアジアに関係のあるものを紹介いたします。

まずお話するのは、ハノイモデルです。これは色々な人たちと共同した実験集合住宅で、ハノイの非常に特殊な敷地割で有名な古いダウタウン「36通り地区」にあるものです。大体2年くらいかけて1キロ角くらいのエリアの全部の家を調査しました。ここは例えばひとつの家が間口2.5メートル、奥行きが最長80メートルで、高密度でも快適な生活を可能にしているところです。ローエミッションで、エアコンなどのエネルギーを使用せずに住む事ができるのです。現代都市計画では道路率が高いほど良いとされがちですが、ここでは家の面積を広くすることでいろいろな知恵を発揮しています。

通りは非常にうるさく、たくさんのアクティビティがあります。しかしながら奥のほうは本当に静かで、中庭では別世界のようです。今は高密度化に従って中庭がつぶされているので、環境が悪

くなってきています。ベトナムはもともと中国的な大家族が主流だったのですが、政府の介入により、現在は殆どが集合住宅です。ほく達は今のこの町の保存のあり方にしがって、容積率200%をどういう風に使うかということにおいて、一人あたりの床面積を17平米として、どのようにヘクトールに1,000人というモデルを可能にするか、ということを追求したのです。

5年もかけて調査しています。その間、高密度性、ローエミッション、古い都市のリニューアル、プライバシーの確保という4つのターゲットに向け、実験住宅を作成いたしました。ボイドという外部と内部の比率、これをボイドレイシオと呼びますが、これが50%になるようにしています。この穴だらけの集合住宅は、6つの家族が住むという設定で造っています。建物の複雑な形は、CFD（コンピューテッド・フロイド・ダイナミックス）で計算している風通しと、家族間のプライバシーの確保という二つを考慮して決めました。完成現場では、一番奥のスペースでも空気が動いているのが確認できました。

複雑な形は、「スペースブロック」という、空間を積み木状にする方法を採用してできたものです。このスペースブロックの効用を発見した後で、ポーラスレイシオやボイドレイシオも簡単に設定できるのではと気が付きました。この法則は、香港のカオルン・オールドシティや台北でのイベント、アジア・デザイン・フォーラムでのプレゼンテーションなどでも実験しています。ハノイモデルでは、例えば空気の入れ替えは、窓の開け方やブロックの組み方を変えることにより可能になりました。結果、実際にこのモデルを建てたときには、一番奥でもちゃんと風が動くようになっていました。

建物は黄色く着色しました。これはベトナムの人たちの意見を取り入れたものです。現地では東西からの直射が厳しく、屋根や空気穴の高さや形も計算して出しました。またハノイでは、食事や飲酒、散髪などを道で行う慣習があります。路上の活動は多く、そのため雨のかからない外部というのは、この場合50%ですが、非常に快適に利用できる場所になるのです。

ほかに同じような空気の動かし方のコンセプトを採用したところとして、東京大学の研究所があります。ハノイに反して、東京大学の実験棟の窓はコンピューターで制御しています。局所的な温度や湿度、雨や風などの条件をコンピューターが判断して自動で開閉する、「呼吸する窓」です。

ここ4年くらい、様々な場所で設計に携わってきました。例えばカタールのドーハ。磯崎さんがマスタープランを敷いたところで校舎を建てました。砂漠の中で太陽がとにかく強力なところ。だから設計の際には光と反射を主に考慮しました。例えば縦の光は暑くないけれど、横からの光は暑い、だからカットする。その反射で壁が黄色く見えたりもします。反射で色を付けているのです。直接光を入れると輝度対比が強くなりすぎるためですが、これで自然光でほぼ明るさが取れています。

建物の中の模様は、コージクリスタルという新しいタイプの幾何学を用いていて、変数によって様々に変化します。三種類の四角形が、一点から繰り返しなしに広がっていくのです。地下の駐車

場の換気に使っているのは、バギドールと呼ばれるウインドタワー、風の塔です。インテリア全体にも、光のスタディが生かされています。一階は教室、二階は研究室などですが、シェードで視界を制御し、カタール初の男女共学の校舎をプロモートしました。オープニングパーティでは、王様が来たりライティングショーを行ったりもしたんですよ。

別件としては、北京の「建外SOHO」があります。これは500平方メートルに住宅にも店舗にも使用できる柔軟性のあるプランをおこしたものです。ダブルスパイラルの階段が全部の家に入っています。単純なフロアで、住宅としても利用できるように、開閉可能な窓や網戸もあります。クライアントが出した条件は、中国っぽさを出さず、完全にモダンなものを造って欲しいというものでした。北京に林立している真っ白な超高層ビルはホワイトモダニズムと呼ばれていますが、最近の特徴です。

他には、天津でグループで携わっているバンサンジンカという住宅地があります。23ヘクタールですが、戸建てを取り扱っています。個室を全部三階に持ってきているので、群になったときに森のように見えます。一階はパブリックなスペースで、二階はなにもない。それをパターン化させています。中国では敷地割というものがなく、全てが国の土地です。建物が建っているところのみ、使用权が分譲されるので、垣根などは何もない。プライベートな庭というのは、屋上などにわざわざ造らないといけないのです。

最後にキルギスタンでのプロジェクト、ユニバーシティ・セントラル・アジアについてです。キルギスタンの首都、ビシュケフから車で五時間くらいの標高2千メートルの山の中に、千人くらいの全寮制の新しいキャンパスを作りました。ここは冬はマイナス40度にもなる極寒の地なので、気候や材料を考えて作っています。プランとしては、まず全ての建物をつなげた、「ネックレス」という3キロくらいの建物の帯を作ります。そして近づきたい部分を折りたたんでいくのです。周りにはドミトリー、真中に教育のための施設と食堂やショッピングセンターを持ってきました。ところが、建設地に活断層があることが分かり、それを避けると冬には全く陽のあたらない場所しかなくなってしまい、また考え直さなければいけない状態になってしまいました。

色々な例を挙げて参りましたが、太陽の位置、湿度や風の強さ、材料の違いなど、日本の中だと当たり前のことを意識しないといけないということが分かってきました。そういう中で仕事をしていくのは、とても楽しく思っています。

梶原 景昭：国土舘大学 21世紀アジア学部長

「Shanghai in the Family Album」

母方の祖父が1943年から3年ほど、上海におりました。家族アルバムの上海の写真をいくつかもっ

てきましたので、それをもとにした上海の話をしていきたいと思います。

上海は映画や文芸作品の中で数多く取り上げられており、そういう意味では象徴性を強く帯びた都市です。10万人を超える日本人が上海に滞在していた戦時中とはとくに、東京の生活とそれほど変わらない、一部密接に連結していた時期でもあったと言えると思います。祖父の中には、当時の中国的教養とヨーロッパ的教養が共存していました。

祖父が上海に着いて始めに住んだのが、現存しているブロードウェーマンションでして、その後フランス租界のヘイグストリートに2年ほど居を構えました。祖父は、日本の中国進出とともに人生を歩み、終戦までの歴史と合わせるように仕事をしてまいりました。明治末期、台湾が日本の領土となって10年後ほどの台南と台中で砂糖園の支配人としてキャリアを始め、大連で大豆のカスから油を採る工場で働き、その後は樺太などで製糸工場の建設、そして国策会社での総裁として仕事を締めくくりました。

こういった環境にしながら、家族間で上海の話題がそれほど頻繁に上ったというわけではありません。ただ、今考えると、上海を通じて縁のあった、そして戦後の中国における革命などで本国にいられなくなったような移住者が、日常生活に入れ替わり立ち代りしてはいったように思います。新しい中国ができてから国際都市上海は大きな変化を経ることになり、それと同時に我が家に時折現れる中国の方たちは、香港を主な活動の拠所にした方たちに変わっていきました。

劉文兵さんという方が書いた『映画の中の上海』という本の中で、「上海は祖国の中の異国だ」というような表現があります。また作家の林京子さんは、少女時代を14年ほど上海で過ごしてらっしゃいますが、著書『上海』でストレンジシティとしての上海の姿を浮かび上がらせています。こういった視点からも、この都市が十分コスモポリタンな町であることが分かると思います。

とはいえ、谷崎潤一郎は「上海交友記」というエッセーの中で「上海は国際都市で素晴らしいところだけれども田舎だ」と記しています。また上海に縁のある山口淑子さん、昔の李香蘭さんは、北京に生まれ上海の映画界で活躍した方ですが、「北京と上海を比べれば、出身であることを差し引いても、断然北京だ」ということを言っています。そういう見方もあるということを知りました。

もう一つ祖父の上海に関する思い出は、後に知ったことですが、1940年あたりに、シャーディン・アンド・マセソンというスコットランド系の商社のケズウィック会長と連携して船会社を興し、上海を中心に日英共同の物資の運搬を行うという話が進んでいました。戦争開始により立ち消えとなりましたが、その手紙がたまたま残っていて、それを見るとかつて日本や中国、その他の諸外国との関係の中で、上海を巡っていろいろな力の働き方があったという、ある種の現場性の一端を窺い知れるように思います。

もちろん上海は小説や映画の舞台として多く取り上げられ、非常に象徴的なレベルで語られる場所でもあります。そして今私が述べたように、ごくごく普通の日本の家庭にとっても布石となった場所であったのです。ピエール・ノラが歴史と記憶の狭間について、「歴史が異様に加速すると、わ

れわれは記録や記憶を歴史の流れの中に定着させようとする。これは全面的な集合記憶というものがなくなったからである」と興味深い見解を述べています。我が家の記憶はこういった写真の中に残されているので、その限りにおいては作られた記憶の中に入っていつてしまっていると考えています。

現在上海は急激な変化を経験し、われわれの生活の様々な局面に関わってくるようになりました。しかしながら歴史の一コマとしても、普通の日本人家族にこのように関係していた過去があるということをお知らせして話を終わりたいと思います。

村松 伸：東京大学生産技術研究所 助教授

「アジア近代建築ネットワークとアジア都市の保存と再生」

本日は「アジアの都市、その記憶の未来」「持続型都市に向けて」ということで、mAANとその誕生、そして上海のワークショップについてお話しします。

アジアは広く、まだ知られていないことが沢山あります。例えば広東の開平というところには、20世紀初頭に建築された洋楼が2千棟くらい残っております。これはアメリカで華僑として働き、稼いだお金でつくったものですが、実際に見てみるとその規模に驚かされます。またインドネシアのパダンには、オランダ植民地時代の1908年に建築されたものが残っています。これから鑑みると、オランダの表現主義は、オランダで発生したものではなく、植民地のインドネシアという異文化とぶつかり合い、発展したものと言えるでしょう。またロシアが19世紀末に造った建物がキルギスのサマルカンドにあります。この建造はフランスがハノイに関わった時期と一致します。このように、建築にはアジアとヨーロッパが密接に関わりあってきた歴史が残っているのです。

19世紀末以降の産物が残るイスタンブールは、世界のアールヌーボーとアールデコが共存している非常に稀有な街です。ところがこういったことはあまり知られていない。なぜならアジア各国は経済成長の真っ只中で、しかもここで対象にしているのは、近代という、伝統でも新しいものでもない中途半端な感じのあいまいなものです。加えて、それらはアジア植民地時代の負の遺産と考えられ、それを消去したいという意思により、多くのものが消滅の危機にあるのです。

しかしながらこれらの価値は再理解の必要に迫られています。持続的な地球、持続的な都市というコンセプトが叫ばれている現在、エネルギー消費の上でも全面的な建替えは馬鹿らしく、また今に繋がる記憶を消してしまうのは、私たち自身を消してしまうことと同じであると言えるでしょう。だからこそ近代の建造物に対する理解を深め、それを保存する必要があるのです。

ところがこういった建築遺産と資産の保存、その活用にはやはり西洋中心主義が介入してきています。例えばオランダはインドネシアの植民地時代における建築を今になって、「相互のミューチュ

アルヘテリテイジ」という言葉で、相互の遺産だと主張しているわけです。また世界遺産というのはナショナルアイデンティティになりうるものに限られていたのですが、人が実際に住んでいる近代の都市建築遺産も認定しようという動きがでてきました。しかしこういった場合でも、西洋と東洋が混在する広東、開平の建築物などは、近代には含まれないのです。これに異論をぶつけるべく私たちはmAANを発足いたしました。mAANの最初のmが小さいのは、近代というものの地域ごとの多様性を表現するためのものです。

2001年にmAAN第一回会議をマカオで開き、アジアの19世紀及び20世紀の都市建築の現状と未来を討議し、「マカオ宣言」というのを表明しました。建築家や都市の専門家に助言をしたり、サポートを提供することで、人類全体の創造的未來へ貢献していくのが目標です。具体的には、建築都市の文化遺産・資産をどのように評価、保存、活用していくかということで、近代建築をその都市の理論や歴史を考察し、それを保存し活用するツール、あるいは教育・啓蒙活動を考案し、ネットワークを確立していくことを目的としています。mAANを中心にした組織を、ユネスコやアガカン財団、ヨーロッパを主な活動の拠点とするDocomomoなどと広めています。

また、近代建築の目録作りも大きな仕事です。日本と韓国、台湾などでは把握している箇所は大きいのですが、他の地域ではまだ調査しきれていないのが現状です。今はマレーシアのマラッカで調査しています。他に、大学院生のためのワークショップや小学生のための都市発見プログラムの計画、「ラウンド」という雑誌や「mAAN・イン・レター」の発行なども行っています。

2005年夏には第二回上海ワークショップを行います。

<ビデオ上映>

登 琨艶 : Creative Shanghai 主宰

「Revitalization of Industrial Heritage: a Case of Creative Shanghai」

改革/開放の2、3年前の1990年、私は台湾から上海に来ました。そのときの上海は、建築の形式や物理的な空間は30年代から40年代のままで、人々は暗く、活気がありませんでした。私は上海を歩きながら、この都市がこれから絶対に変わってくると確信していました。その変化に建築家として関わっていきたいと思い、台湾の友人に協力を仰ごうと思いました。

しかし当時の台北は経済成長を遂げていて、その華やかな雰囲気の中で暗い上海の可能性を語っても、一笑に伏されるだけでした。その時は上海には千人しか台湾人が在住しておらず、その殆どはヤクザ社会の人だったりのです。こんなにちの上海には台湾人60万人、日本人が6万人滞在しております。とくに台湾人の集中区になっている場所は、全世界の人たちの溜まり場となっています。そこではブランドの偽造が有名になり、それを目的に人々が集まってくる。その結果によって作られた都市や建築は、あまりいいものではないと私は感じております。

私ならもっと上海の歴史やその建造物を尊重していきたいと考え、上海の記憶の再生に携わってきました。そのなかでも現在進行中のものを本日はお話ししたいと思います。

まず蘇州河の7キロほどの範囲にある、20年代、30年代の古い倉庫の保存を働きかけました。私の事務所は昔の倉庫をリフォームしたのですが、このように倉庫など建物を保存しようとあちらこちらで話をし続けた結果、政府を動かし実現することができました。宣伝や公布によって影響力が付き、また政府にも働きかけが可能になったので、mAANと村松先生には、その点感謝しています。おかげで色々な構想が実現できています。また私自身も講演などを依頼されるようになりました。

次は、この河の北に広がる、15キロ平方メートルほどのアジア最大の公共区の工場を保存、そして再利用化させていきたいと考えています。蘇州河の倉庫建築の保存という実績により、mAANだけでなく上海の市政府も私の動きに注目してくれています。

1940年代から1990年代まで蘇州河の建物の状況はあまり変化しませんでした。蘇州河というのは蘇集から上海まで流れてきた河で、飲み水としてだけでなく、輸送路としても大動脈的な役割を果たしてきました。この河の周囲にある景色を見て私は、再開発するときには保存も兼ねてたいと思いました。上海政府のもともとの計画では、昔の歴史的な建造物や倉庫を壊し、新しい高級マンションを建てようとしていたのです。私はそれに猛反対しました。高層ビル建築群はだんだん蘇州河近くまで寄ってきましたが、当時の蘇州河というのは大変環境が悪く、水がくさかったのです。それが良かったのでしょうか、古い建物が壊されずに残っていました。上海政府はかなりのお金をかけ、蘇州河の改善に乗り出しました。しかしながら政府のやりかたは、古いものを完全に新しいものに置き換えるといった具合で、私はそれに対し、批判的な態度をとっていました。

意見を色々文章化したのですが、その中に「記憶を失った都市」というのがあります。その中で先ほどと同じような石橋を紹介しています。その橋には共産党と国民党が戦った内戦の最後の戦いが行われた歴史があります。また、上海の人々がイメージしている『いいもの』は、海賊版のブランドから発想したような近代的なビルなのです。私は蘇州河に広がっている倉庫の一つ、1930年代の上海は彼なしには語れないというほど有名なやくざのトップだったトゥ・エイションのものを借りてオフィスにしました。その知名度を借りて建物を保存しようとしたのです。専門家や政府の人たちのみならず、通常の市民にもその歴史を語ることによって支持を得ることができたと思います。

倉庫を事務所として借りる以前、この場所は腐ったごみやし尿処理場の匂いが立ち込めていました。借用当初は変人扱いされましたが、最近では「あなたが蘇州河を救った」と言ってくれる人もいます。私が借りた倉庫は、30年代のアールデコ末期の様式のパサードを有しており、設計用の作業場はものすごく広いです。日本や世界中のあちこちから建築家達が訪ねてきてくれています。歴史的な建造物は決して新しく作り直すものではなく、それを使ってどのように面白く、文化的にしていけるかを、例えばオフィスの室内に竹を植えたり、発表会用に飾り付けたりなど、色々試すこ

とでその考えを皆に示しています。また、こういった考えを大衆に受け入れてもらうことで、逆に政府に影響を与えている部分もあると思います。

インテリアデザインのショウを私の古い倉庫だった建物を利用して行ったことがあります。こういった古い建物でもおしゃれなことができるということを示したことで、このショウはこの後ずっと古い建物で行うようになりました。また建築家の磯崎新さんが訪ねてきた際、工場の一つに舞台を作り、ハスの花を飾って劇を行いました。他にも早稲田大学の研究ゼミに場所を貸したこともあります。このようにいろいろな人によって私の考え方が広がっていくようになり、古い建物の再生、再利用に対する考えが広く受け入れられるようになりました。

蘇州河地域保存の成功にやる気を促され、今度は少し川上に広がっている工場群の再生に携わりたと思い始めました。1910年代から1930年代の間、ここに世界的にもモダンで先進的な工場が建っていました。上海の工場や産業的な革命の力の発端です。最初は資本家達に利用され、次には共産党がこの地域の労働者を起用し、中国が変わっていきました。毛沢東による文化大革命もここで起きました。しかしながら上海の開放とともに力が弱くなってきたのです。ここは地理的に見ても上海の中心になります。だから破壊される前に先手を打とうと思ったのです。4年半の話し合いの結果、この一軒を借り受けることができました。

私は今、都市計画家として、ワークショップなどを斡旋しています。その一つがmAANでして、その趣旨に沿って作業に使用した材料の60%を再利用しています。次は、上海近郊の農村の保存に携わろうと思っています。そのために一番大きく古い船を購入しました。私はもともと農業の専門でしたので、最後まで農業と関係していきたいのです。こういった上海の記憶を大事にして、再生・再利用に尽力していきたいと考えています。